

教師のアセスメント力の向上とそれを活かした学級づくり ——学級づくりの一環としての特別支援教育を目指して——

1. はじめに

学校心理学の、『学校生活で苦戦している児童に対して、児童一人一人が学習面、心理・社会面、進路面、健康面などにおける課題の取り組みの過程で出会う問題状況の解決を援助し、児童の成長を促進しよう』とする視点から、学級の全ての児童が支援の対象者であると捉え、学級づくりや特別支援教育を行っていくことが必要である。学級のすべての児童を理解しそのニーズに応じて援助をしていく1次的援助サービスは、学級づくりそのものであり、苦戦し始める児童や特別な支援を必要としている児童に支援を行う2次的・3次的援助サービスは、まさに特別支援教育である。この点から、学級づくりと特別支援教育は切り離しては考えられない。

現在、学校現場においては、ほとんどの学級担任が通常学級の中で特別な配慮の必要な児童への支援を行っている。近年、校内委員会等において配慮の必要な児童の支援方法を学校全体で検討することも増えてきたが、まだまだ学級担任が一人で児童の困り感を把握し、担任の判断で支援を行っていることが多い。教師の観察による児童・学級の実態把握は不正確であることも多く、教師の観察だけに基づく学級経営の中では、適応感の低い児童はますます適応感を低下させることも分かっている(西谷・秋光,2008)が、ニーズに応じた支援ができないまま、児童の学級適応感が下がっている場合が多いのが現状である。

このような状況を改善するために、標準化された客観的なアセスメントを取り入れる方法が考えられる。このような方法を取り入れることに対して抵抗を感じる担任も多いが、標準化されたアセスメントを取り入れることは、学級づくりの一貫としての特別支援教育を行っていく上で、学級担任の児童理解の視点を広げ、アセスメント力の向上をはかる効果があるのではないかと考える。

2. 目的

学校現場において、標準化されたアセスメントを取り入れることが児童や学級のより深い理解・把握や、特別な配慮の必要な児童へのより効果的な支援につながる事が確認されれば、その活用が促進されると考える。またそれによって、学級担任の精神的な負担の軽減にも役立つと考える。

そこで、より客観的に児童を把握することを促進するために、学級担任が通常から行っている行動観察に加えて、標準化されたアセスメントを取り入れることを試みる。さらに把握された実態を、教師の学級づくりにどのように活かすことができるのかを実践的に検討する。このような取り組みを通して、特別支援の必要な児童や学級全体の適応感がどの程度向上するのかを確認し、より良い学級経営の方法について明らかにしたいと考える。

3. 方法

教師の行動観察を中心とした学級経営の中に、客観的なアセスメントを2回取り入れていく。そして、結果を活用しながら学級全体と個別の支援を確認・修正しながら、学級経営を行っていく。時系列に沿って学級の様子や配慮の必要な児童の様子を記録していくことで、児童の学級適応感の変化を確認し、アセスメントの結果が、学級づくりと個別の支援に生かされているかどうかを確認する。

・アセスメント1回目・・・6月30日 ・アセスメント2回目・・・10月30日

4. 取り組み

(1) 学級づくり

学年が決まった時点で担任は、学校の教育目標に基づき、学年目標、学級目標を設定する。そして、学年初めの学級の実態を把握し、具体的な指導項目を設定していく。また、前年度の校内委員会で確認し、引き継ぎが行われた児童の実態を把握し、支援内容を決定していく。このようにして、学期ごとに特徴的な行事

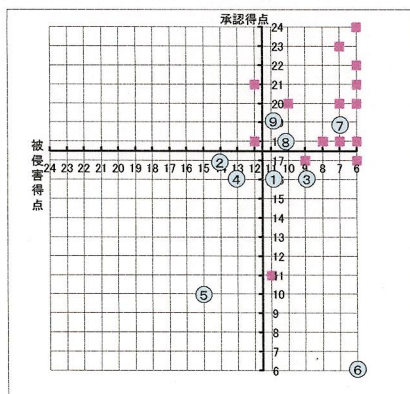
も取り入れ、教育課程に基づき計画的に授業を行い、学級経営を進めていく。

(2) 具体的な取り組み

①学年はじめ（4月～6月）：学級担任の行動観察により、学級づくりと個別の支援を行う。

学級全体の様子や変化	学級全体への働きかけ
<p>男子13名 女子16名 計29名 (交流学級児童2名)</p> <p>A 自己肯定感が低い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6年生になって、下級生のためにリーダーとして頑張ろうとしているが、言い方ややり方に不安を持っている。(登校班長、縦割り班活動、クラブ活動、委員会活動、地域での活動等) ・やれればできる力を持っているが、自信を持って行動することができにくく、途中であきらめてしまい、最後まで根気強く取り組むことができない児童がいる。 ・自分の力を出し切りたいと思っているが、友だちの反応を気にしながら行動する児童が多い。 <p>B 人間関係の希薄さ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・明るく活動的な学級ではあるが、自己中心的な発言や行動も多く、友だちの思いや願いに気づくことができない児童がいる。 ・友だちの言葉に傷つきやすく、関わり方が分からない児童がいる <p>C 基礎学力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習意欲や学習態度に差があり、聞く・話すのけじめがつきにくい。 <p>D 児童理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・表現力やコミュニケーション能力の低い児童が多い。 ・前年度より引き継ぎのあった個別の配慮を要する児童9人の課題は、学級の課題とも重なり、一人一人のニーズに応じた支援が必要である。 	<p>A 自己肯定感を高める</p> <ol style="list-style-type: none"> ①行事と絡めた自己表現力の育成 ②主体的な特別活動への取り組み ③縦割り班活動・運動会・音楽会などへの一人一役での参加 ④パターンづくり <ul style="list-style-type: none"> ・クラブ、委員会学級会等での司会進行の仕方 ・学習の約束 ・教室掲示(予定・変更の連絡が確認できるスペース) <p>B 人間関係づくり</p> <ol style="list-style-type: none"> ①学級での居場所づくり、リレーションの確立をはかる <ul style="list-style-type: none"> ・構成的グループ・エンカウンターの実施による人間関係づくり ・違いに気づき違いを認め違いを生かす作文指導 ・上手な聴き方・上手な断り方・あたたかい言葉かけ <p>C 基礎学力</p> <ol style="list-style-type: none"> ①学級のルール of 確立をはかる ②基礎学力の定着と個に応じた指導方法を検討する <p>D 児童理解をはかる</p> <ol style="list-style-type: none"> ①行動・授業態度の観察、日記・作文等による児童の思いの把握 ②家庭の様子の把握 ③個人と学級集団の実態把握とルールとリレーションの関係把握 ④学級経営の自己点検 ⑤配慮が必要な児童への具体的な支援

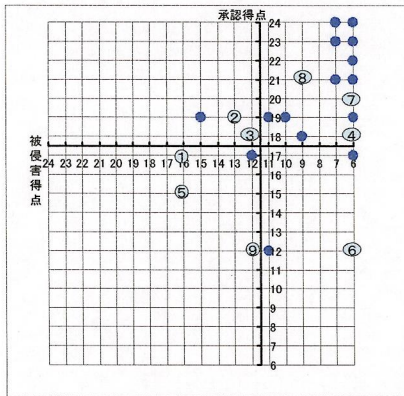
②1回目Q-Uの実施(H22.6.30)とその結果を活用した取り組みを行う。(7月～10月)



グラフ1 Q-U 1回目(H22.6.30)の結果

- ・学級全体は59%の児童が、学級満足群に入っており、居心地のよさを感じ、落ち着いて来ていることが分かった。これは、担任が行動観察で感じていた実態と重なる。
- ・教師の行動観察による児童理解とそれによる手立てが、学級全体に効果的に働いていたと考える。
- ・しかし、配慮が必要な児童は、担任が把握している以上に学級適応感が低かった。特に⑤児と⑥児については、もっと声をかけ、承認得点を上げるための手立てが必要であることが分かった。
- ・また、⑤児が何にやられていると感じているのか、何が嫌なのかをはっきりしなければならないことも確認しなければならないことが示唆された。
- ・学級全体への引き続きの指導と、①から⑨児への対応の再検討(特に⑤児、⑥児)を行っていく。

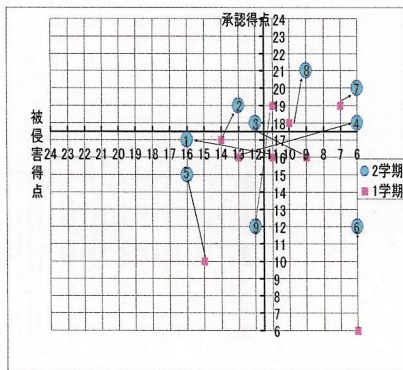
③2回目Q-Uの実施 (H22. 10. 30) とその結果を活用した取り組み (11月～3月)



グラフ2 Q-U 2回目 (H22. 10. 30) の結果

- 学級全体は66%が学級満足群にあり、学級への担任の取り組みは効果があったと言える。
- 1回目の結果から特に気になった⑤児と⑥児については、承認得点は上がっていた。これは、アセスメントの結果を活用することで、担任教師が支援方法を変えた結果と考えられる。
- ①児と⑨児については、行動観察において把握していた実態以上に悪い結果であった。この結果を知ることによって、担任は、より丁寧に二人の児童を観察するようになった。
- ①児については、専門機関からも情報を得ることにした。
- 学級全体への引き続きの指導と、①から⑨児への対応の再検討を行い、学級指導を行っていく。

④配慮の必要な児童の学級適応感の変化



グラフ3 配慮の必要な児童の適応感の変化

- ①児と⑨児については、グラフの結果から、①児は被害得点を下げたための手立て、⑨児については承認得点を上げるための手立てが急務である。
- ①児については、本人の特性による思いこみの強さと気持ちの切り替えができていないことが大きな課題であるため、専門機関への相談も必要であると考えます。
- ⑨児の承認得点の急激な変化は、非社会的な行動にもつながっていた。家庭訪問を行ったが協力がなかなか得られなかった。そこで、学校全体として見守っていく方法をとることにした。
- 2学期後半から学年末に向けて、学級全体への引き続きの指導と、①から⑨児への対応の再検討を行い、学級経営を行っていく。

⑤児童の学級適応感の変化

標準化されたアセスメントを活用することで、学級全体の児童の学級適応感の向上を視覚的に確認することができた。①児と、⑨児以外のアセスメントの結果は、学級担任の行動観察で得た結果を裏付けるものであったので、担任は自信を持って指導行動を続けることができた。このことから、学級適応感の低い児童は、意識して対応することで、学級適応感をあげることができることも示されたと言える。

しかし、①児と⑨児の変化は、担任が感じている以上に学級適応感が下がっていた。⑨児については、このアセスメントの結果を意識していたことで、⑨児の変化を意識して観察するようになり、リストカットに気づくことができたとも言える。①児については、言葉で説明できない友だちとの嫌な思いを、アセスメントの結果を見ることで担任は確認することができ、担任が行動観察で感じていた以上の困り感に気づくことができた。

5. 考察

学級担任の行動観察と客観的なアセスメント (Q-U) を活用しながら、学級づくりを行ってきた。学級の状態も児童の学級満足度も、学級という枠の中で常に変化していた。Q-Uを2回実施したことで、学級と児童全員の変化を細かく把握することができ、効果的な支援につなげることができたと考えます。

Q-Uの1回目と2回目の結果を比べると、学級全体のプロットが右上の方向に動き、児童の学級満足度が高くなったことが確認された。担任自身も学級の状態がよくなってきたと実感していたが、それを裏付ける結果となった。また、客観的なアセスメント (Q-U) を活用したことで、学級担任が思っていた以上に学級で不適応

をおこしていた児童を把握することができ、何となく感じていた児童の困り感が、学級の中での居心地の悪さであったり、自己肯定感の低さであったりしたことも見えてきた。児童の学級適応感が悪くなった場合でも、客観的なアセスメントの結果を活用することで、誰が悪くなったのか、どのように悪くなったかを確認することができ、すべての児童一人一人の実態に応じた支援の修正を行うことができた。

個別の支援を行ってきた児童についても、Q-Uの結果からも、1回目より2回目の方がよりよい方向に変化しており、9人中7人の学級適応感の上昇が確認できた。担任の行動観察とアセスメントの結果から、一人一人の学級での状態を確かめ、ニーズに応じた支援の修正を行ってきたことが、児童の学級満足度を高めることにつながったと考える。また、①児や⑨児のように、行動観察では漠然とした感覚でしか分からなかった児童の実態も、アセスメントの結果から児童の学級適応感の変化を確認することができた。

学級担任は、支援が必要とされた児童に対して、行動観察をしながら具体的な支援を行っている。しかし、その支援の効果を確認する方法も、教師の行動観察であった。今回Q-Uという客観的なアセスメントを実施したことで、学級の状態と児童の学級満足度を視覚的に数値で確認することができた。学級担任の行動観察に加え、客観的な視点からも支援の効果を確認することができたことは、学級づくりと個に応じた支援の修正を行っていくうえで効果的であったと言える。つまり、客観的なアセスメントを取り入れることは教師の行動観察の視点をより具体的に深め、教師のアセスメント力を向上させ、学級経営力を深めさせることにつながったと言える。

6. 今後の課題

「支援」という視点で捉えると、特別支援教育は特別なものではなく、学級づくりを基盤に、児童一人一人の育ちをめざしていくものであった。しかし、まだ始まったばかりの特別支援教育は、児童の課題の把握と個に応じた支援の方法を手探りしているのが現状である。個のニーズに応じた支援を行っていくためには、アセスメントをより丁寧に行い、的確な課題の判断が必要となってくる。

今回は、Q-Uを2回実施したことで、児童の学級適応感の変化を比較・確認することができた。Q-Uは、信頼性があり一般化されたアセスメントではあるが、担任の抵抗感が合ったり、学校現場で活用していくためには購入したりしなければならず、なかなか学校現場に取り入れられないのが現状である。教師に児童理解の気づきを促し、自分の指導行動をふり返らせることを目的にアセスメントするならば、1回の実施でも効果があるのではないかと考える。

また、Q-Uの結果は絶対的なものではない。自分の気持ちを出せない児童もいるし、その時の気分で答える児童もいると思われる。よって、Q-Uの結果がすべてであると判断するのは危険である。あくまでも児童理解のヒントとして捉え、学級担任の行動観察による実態把握を重視しながら、一人一人の課題に応じた支援を行っていくことが大切である。

以上のことから、Q-Uだけではなく、何らかの児童理解の共通の物差し（アセスメント方法）を学校現場に取り入れ、全職員の共通の児童理解の物差しとすることで、経験年数にかかわらず、同じ土俵で児童の実態について話し合いを行うことができ、教師のアセスメント力を向上させるとともに、学級づくりを効果的に行うことができるようになるのではないかと考える。

7. おわりに

学級づくりや特別支援教育の具体的な取り組みが課題となっている現在、児童に対する学級担任の気づきと柔軟な指導行動の見直しが求められている。困り感のある児童に対する教師の受容的な共感的な対応は、教師の気づきから始まる。この気づきを促進するのが、同僚からのアドバイスであったり客観的なアセスメントであったりすると考える。教育現場の世代交代が進んでいる現在、教師自身の児童理解の視点を広げ、全職員が児童を共通理解していくための一つの方法として、客観的なアセスメントを取り入れ、教師のアセスメント力を向上させる取り組みをすすめるべきではないかと考える。

※ 引用文献

- 河村茂雄・藤村一夫・粕谷貴志・武蔵由佳 2004 Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド 図書文化社
松浦宏 新井邦二郎 学校心理士と学校心理学 北大路書房
川村茂雄 学級崩壊予防・回復マニュアル 図書文化